

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Influence of parity and mode of delivery on mother–infant bonding: The Japan Environment and Children’s Study

和文タイトル: 分娩経験と分娩形式が対児愛着に与える影響: エコチル調査より

ユニットセンター(UC)等名: 富山UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Affective Disorders

年: 2020 月: 2 巻: 263 頁: 516–520

筆頭著者名: 吉田文俊

所属UC名: 富山UC

目的: 分娩経験の有無および分娩形式(帝王切開or経膈分娩)によって、1歳の対児愛着形成が影響されるかどうかを調べた。

方法: 対象は82,540組の母児。母児関係は児が1歳になった時点で母親が回答するMother-to-Infant Bonding Scale Japanese version (MIBS-J)の値で評価した。MIBS-Jの総得点および二つの因子;愛情の欠如と育児不安のそれぞれ合計得点と、分娩経験と分娩形式との関連をGeneralized linear regression modelsにより求めた。

結果: 初産婦と経産婦では、初産婦のMIBS-J値が有意に高かった。一方、経産婦で帝王切開になった場合統計的に有意に対児愛着が悪化するが、非常に小さい値であり、分娩形式の差はほぼなかった。

考察:(研究の限界を含める) 初産婦は経産婦と比較して対児愛着が悪い傾向があった。経産婦で帝王切開になった場合統計的に有意に対児愛着が悪化するが、非常に小さい値であった。そのため、帝王切開は対児愛着にほぼ影響はないと言える。本研究で計測した対児愛着は、母親の自記式回答に基づくもので客観的な指標ではないこと、帝王切開は計画的な帝王切開と緊急帝王切開を区別できていないことが主な研究の限界である。

結論: 初産婦は経産婦と比較して対児愛着が悪い傾向があった。一方、帝王切開による出産となっても、対児愛着にはほぼ影響はないということが明らかとなった。